

「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」へのインタビュー調査 加藤悠二

1 はじめに

私は2002年にICUに入学して以来、常々、異性愛者が持つ同性愛者への好奇心・興味関心は、いったいなんなのだろうか、という疑問を持っていた。同性愛者への興味を持つ人は、往々にしてヘテロセクシュアル女性（生物学的性別が女性、性自認が女性、性的指向が男性である（とされている／と感じている）人）であり、彼女たちの好奇心の対象は、往々にしてゲイ男性（生物学的性別が男性、性自認が男性、性的指向が男性である（とされている／と感じている）人）だった。¹ゲイ男性の友だちが欲しい。ゲイタウンである新宿二丁目に行ってみたい。そんなことを興奮した様子で語り合うヘテロセクシュアル女性が、私の身の回りには多くいたためである。

その一方で、2004年からCGSの活動に関わるようになっていくなかで、セクシュアルマイノリティをサポートしていきたい、という意志を持つヘテロセクシュアル女性・男性に知り合う機会もまた、得られるようになっていった。CGSで知り合った教職員や学生だけでなく、学外では「LGBTの家族と友人をつなぐ会」をはじめ、多くの人々や団体と接触を持つ機会が、だんだんと増えていったのである。

私は以上のような個人的経験を発端に、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」に対してインタビュー調査を行なうことを計画した。ゲイ男性と関わりを持とうとするヘテロセクシュアル女性が、興味本位であれ、そうではない問題意識を持つからであれ、なぜそうしたいと思うのか、その動機や背景を聞いてみたいと感じるようになったからである。日本において、ヘテロセクシュアル女性とゲイ男性の関係を描いたメディアに対する検討・批判は行なわれてきた一方で、ゲイ男性と交流を持つヘテロセクシュアル女性に対する調査研究は行なわれてこなかったためである。

前述の通り、ヘテロセクシュアル女性とゲイ男性の関係は、1990年代に日本のマスメディア上で起きた“ゲイ・ブーム”を巡るかたちで論じられてきた (McLelland, 1999/2000; 石田, 2007a/2007b, etc.)。日本における“ゲイ・ブーム”とは、一般的に、1991年2月に発行された女性誌「CREA」の「特集ゲイ・ルネッサンス'91」という記事を端緒に、「実写と小説・漫画とを分ちがたく捉え、ゲイのライフスタイルを、エッセイや座談会、インタビューの形式で積極的に読者に与えていた」マスメディア上での現象で、1995年頃までその状態が続いていた、と考えられている (石田, 2007a, p. 48)。この“ゲイ・ブーム”においては、「男と男の恋愛や、ゲイという存在に、女性たちはなぜ惹かれるかという謎解きが頻繁になされた」とい

う (ibid., p. 49)。

ヘテロセクシュアル女性がゲイ男性に惹かれる理由は、彼女たちが置かれた性差別構造にあると、「ゲイ・ブーム」研究では論じられている。ヘテロセクシュアル女性は、「男性の女性に対する構造的なアドヴァンテージ」が基盤となり、「女性たちの間に、相対的に優位に立つものと相対的に劣位に置かれるもの、というもう一つの差別」が生じる、「二重化」された性差別の構造に置かれている (吉澤, 2006, p. 97)。この構造においてゲイ男性は、ヘテロセクシュアル女性にとって、男性上位・女性下位の性抑圧構造から脱却させてくれる「新しい男性」であり、自分と男性を奪い合うライバルとはならない「身を委ねられる女性」である、「理想的ゲイ男性」として表象されていた。そのなかで、ゲイ男性は「社会的には男性からの差分として、真意的には女性への近接として」、理想化されていった (石田, 2007a, p. 51)。

しかし、これらの理想像は幻想であるとして、ゲイ男性・レズビアン女性の研究者やアクティビストを中心に、様々な批判がなされた。Hall は研究者の立場から、ゲイ男性の理想化は、ゲイ男性とヘテロセクシュアル女性の両者にとって、性抑圧構造の問題を解決せず、むしろ問題の所在を隠蔽し得るものである、と批判している (1998/1999)。Hall と同様の立場からヴィンセントは、「ゲイ・ブーム」で見られる一見肯定的に見えるイメージは、しかし、そのイメージから外れる者に対する差別が生じる危険性があるという意味で、「非常に扱いにくい差別の形態」であると指摘する (小谷 & ヴィンセント, 1996, p. 84)。そしてこのイメージは、欧米に見られるような身体的な暴力ではないものの、蔑視・差別を加える日本的な同性愛嫌悪であると指摘している (ibid., p. 84)。また、ゲイ・アクティビストであり文筆家である伏見は、勝手に理想的なイメージを抱いてゲイ男性に近づき、そのイメージに裏切られたときに怒り出すヘテロセクシュアル女性の行動を端的に、「女のセクハラ」と評している (伏見, 2004, p. 565)。平野 (1994) や掛札 (1992) も同様に、「ゲイ・ブーム」による同性愛者を称揚するイメージは、異性愛者が安全である限りにおいて同性愛者を認める、という立場から発されたものであることを指摘している。「ゲイ・ブーム」を「くだらない」ものとして否定する声は、ブームの当初から、ブームの前段階からさえも、繰り返しなされてきたのである (石田, 2007a, p. 52)。

はたして、私の身近にいたヘテロセクシュアル女性たちのゲイ男性に対する興味関心は、「ゲイ・ブーム」で見られた「扱いにくい差別の一形態」としての「理想的ゲイ男性」像と等しい性質をもつものなのだろうか。しかし、本研究では、ヘテロセクシュアル女性が持つゲイ男性への興味関心は同性愛嫌悪の一種である、という分析には与しないものとした。本論文の目的は、ヘテロセクシュアル女性の持つゲイ男性像を糾弾することではない。本研究では、ヘテロセクシュアル女性たちが、性差別構造のもとでどのように生き、ゲイ男性との親交を望むよ

うになったのか。また、実際にゲイ男性たちとはどのようなコミュニケーションをとっているのか。その一例を示すことを、第一の目的としたいためである。

2 研究手法

本研究では、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」14名に対して、インタビュー調査を行なった (see Table 1)。対象者の年齢は20代～40代 (20代9名・30代4名・40代1名) で、筆者知人のゲイ男性に紹介してもらおう・対象者の友人を紹介してもらおう、という形式で集めた。ここで「親交」とは、携帯電話の番号やメールアドレスを交換していたり、インターネット上でつながりを持っていたりするため、頻りに連絡を取り合うことができ、また、よく実際に会うこと」と定義した。また、対象者がゲイ男性とのコミュニケーションをどの程度頻繁にとっているか、また、どの程度慣れているのかを感覚的に計り、インタビュー本題につなげていく尺度のひとつとして、「顔見知り」程度のゲイ男性が何人いるかも尋ねた。「顔見知り」とは、「連絡先を交換はしているが、そこまで頻繁には連絡を取り合うことがない仲の人」ないし「連絡先の交換などはしていないが、特定の場所 (学校や職場、新宿2丁目のゲイバーなど) に行けばよく会える相手で、互いに挨拶をしたり、会話を交わしたりはする仲の人」または「最近では連絡を取っていないが、かつては仲が良かった人」のことと定義した。

Table 1にも見られるように、今回のインタビュー対象者のうち6名 (Aさん～Fさん) は、知人に頼んで紹介してもらったり、ゲイバーやゲイ男性中心のクラブイベントに出向くなど、積極的に行動した結果、初めてゲイ男性と知り合う機会を得た人たちである。例えばFさんは「ゲイの友だちって、まだいないよなって思って、だったら欲しいなー、って、前々から思ってた」ため、知人に頼んでゲイ男性を紹介してもらい、親しくなったという。また、Aさんは、「東京に住んでいて、なかなかゲイの人に、会える機会、っていうか、そういうのがなくて、けど、ゲイナイトに行ったら、ほんとに別世界で、見たことのないような人たちがいっぱいいるよ、っていう話を (ゲイナイトに行ったことのあるヘテロセクシュアル女性の友人が) してて、で、私も興味があって、行きたい、って言ったんです」と語っている。このような、身近にはいないゲイ男性への興味関心が、これらの対象者らが行動を起こすきっかけとなっている。

他の8名 (Gさん～Nさん) は、高校や大学などで、友人からカミングアウトを受けたり、ゲイであることを公言している人と会おうなど、偶然ゲイ男性と知り合う機会を得た人たちである。特に戸惑うこともなくゲイ男性の友人を増やしていったKさんのような対象者もいる一方で、「私ほんとに普通のうちで育ったので、そういうことに関してそういうものの存在とか、なにも知らなくて、はじめ結構こう悩みそがこう、なんかこう調整に時間がかかりましたね」と語るIさんのように、ゲイ男性の存在を受け入れるまでに時間がかかった対象者もみられた。

Table 1
インタビュー対象者一覧

	年齢	職業	親交のある ゲイ男性 の人数	顔見知り 程度のゲ イ男性の 人数	初めてゲイと知り合った経緯
A	20代	会社員	0	1	自発的(ゲイクラブに連れて行ってもらった)
B	30代	デザイナー	10~	10~	自発的(知人からの紹介)
C	30代	保育士	10~	10~	自発的(ゲイバーに連れて行ってもらった)
D	20代	主婦	20	20-30	自発的(ゲイバーに連れて行ってもらった)
E	40代	デザイナー	5	20-30	自発的(ゲイクラブに連れて行ってもらった)
F	20代	イラストレーター	3	5	自発的(知人からの紹介)
G	20代	会社員	5~	20	偶然(学校で友人になった)
H	20代	学生	1	1	偶然(友人からのカムアウト)
I	30代	翻訳業	10前後	10~	偶然(友人からのカムアウト)
J	20代	会社員	2, 3	0	偶然(友人からのカムアウト)
K	20代	会社員	20	多数	偶然(学校で友人になった)
L	20代	会社員	3	多数	偶然(学校で友人になった)
M	30代	デザイナー	2	0	偶然(共通の趣味で知り合った)
N	20代	学生	2	2	偶然(友人からのカムアウト)

インタビュー調査は、「ゲイ男性とどこで知り合い、どのような交流をしているか」「ヘテロセクシュアル女性／男性とは、どのような関係を築いているか」、また、「レズビアン女性の友人はいるか」などの質問を用意し、約1時間行なった。インタビューは全て録音し、音声データを書き起こしたものを分析対象とした。本論考では、対象者がゲイ男性との間でどのような関係を築いているのかにフォーカスを当てるべく、「ゲイ男性との関係の居心地の良さ」と「ゲイ男性との関係の居心地の悪さ」に論点を絞り、調査の成果を紹介したい。

3 調査結果

3.1 ゲイ男性との関係の居心地の良さ

対象者が感じるゲイ男性との関係の居心地の良さのひとつは、ヘテロセクシュアル男性と違い、お互いに性的欲望や恋愛感情を向け合うことが無い、という点に見られる。特に、ゲイ

男性が多く集まるクラブにおける安心感は、A さんをはじめ、複数の対象者が語っている。また、クラブで開催されているゲイナイトに関する語りも、多く聞くことができた。なおゲイナイトとは、新宿 2 丁目のクラブに限らず、渋谷や新木場など、様々なクラブで多種多様に開催されている、ゲイ男性を主な対象としたダンスイベントである。受付で女性の入場が断られる場合もあるが、女性も入場できる、いわゆる「MIX」のイベントも多く開催されている。

A さんは、青山や渋谷にあるクラブで、ヘテロセクシュアル男性から「女っていうかもう、ほんととメス、みたいにしか見られないのは、いやで」ある、と考えている。実際にヘテロセクシュアル男性から「いきなり、(腕を) ガツとか掴まれたり」するなど、危険な目に遭ったこともあるため、性的欲望を向けられることへの危機感を覚えている。そのため、A さんにとってゲイナイトは楽しいだけでなく、「安心感、っていうのも、あった」イベントだったという。N さんもまた、六本木のクラブと、新宿 2 丁目のゲイ中心のクラブを比較し、次のように語っている。

N「ダンス踊ってても、そのやっぱり、こう、六本木のほうだと、もう、やっぱもう、異性愛、の男性、しかいないじゃないですか。だから踊ってても、なんか腰触ってきたりとか、ほんとにいやらしい、のがつきまってくるんです、けど、でも、あのやっぱ新宿とかだと、彼、らは、その女性？ に興味ないっていうのはわかってるから、こう、不快感がないっていうか。そういうので安心する面っていうか、そういうのがありますね」

そしてこのような安心感は、クラブのように不特定多数の人が集まる場面だけではなく、親しいゲイ男性との間においても見てとることができる。I さんは、親友のゲイ男性とのコミュニケーションを、「なんかこう脳みそ全部、こう、投げつけても大丈夫、みたいな (笑)」ものであるとして、笑いを交えながら、次のように語ってくれた。

I「たまたま私のはじめに友だちになったゲイの人が、とってもこう、感受性、心の豊かな人なのね？ だから、こう、なあっていうのかな、こう、んー、悩みとかも楽しいときも、苦しいときも受け止めてくれるし、たぶんこっちも彼にそうしてると思うのね、なんかそういう関係ってほんとに (ヘテロセクシュアルの) 男と女だと、すぐ恋愛とかになっちゃうじゃない？ だから逆に続かない？ でも、こう彼とかの場合は、絶対そこがないから、うん、だから逆に、家族じゃないけども、こう守り合う、みたいな、ちょっと守り合う、的なところも、どっかあって」

Iさんと同様にDさんは、「ノンケ（ヘテロセクシュアル）の子は、やっぱり、普通に会話してても、若いと、恋愛面に持っていこうとする（笑）、人が多いし、でもゲイの人は、まずないから、で、どう友だちになれるかなあとか、そのぐらいしか頭がないから」、余計な気を遣わずに会話を楽しむことができる、と感じている。また、Dさんは、ヘテロセクシュアル女性のなかでも「男の前と女の前で態度が違う」ような「プリプリしてる子が苦手」であり、「それ（男性への媚び）を利用して女を見るのが辛かった」と語っている。しかし、ゲイバーではそのようなヘテロセクシュアル女性を見ることもなく、また、ゲイ男性と恋愛関係になることもなく、友達として仲良くなれることが嬉しかったのだという。これらの発言からは、ヘテロセクシュアル女性からもゲイ男性からも恋愛感情が沸かず、恋人関係になり得ない関係の居心地のよさを見てとることができる。

なお補足として、レズビアン女性から性的な関心を向けられることに対して危惧感を覚えている対象者も見られた。なかでもDさんは具体的に、「2丁目目を追っかけられたことがあって、それ以来ちょっと女の子がこわくなったんですよ2丁目にいる女の子が。スカートめくりとかもされたんですよ。ちょっと酔っぱらってるときに押し倒されたりとか」と、レズビアン女性に追いかけられた経験から恐怖感を抱くようになった様子を語っている。しかし、「あんまり心を開けない子がいて、だけどレズなんだみたいな、その子と仲良くなって、話してるうちに、まあ、あんまりそんなにビックリしなくなったけど」と語るように、次第にレズビアン女性とも友人関係を築けるようになっていったそうである。

また、性的な関心を向けられない場面であっても、普段ヘテロセクシュアル男性に対して抱いているストレスを感じないことが居心地が良い、とする語りも聞くことができた。Eさんは、「いばってる人大っ嫌い。なんか男だっていうだけで、あの、いばってる人いるじゃない。なーにもできないのに、っていうのが大っ嫌い」と、ヘテロセクシュアル男性から感じるストレスを端的に表現している。Eさんのゲイ男性の友人にはそのようなストレスを感じさせる人はおらず、そのことが居心地の良い関係を作りだしているという。

Hさんは普段、「男友達と話すときは、私はとっても、自分の言動に気を遣うっていうか、できるだけ、理論的に話そうと思うの。そうしないと（男友達は私の言っている意味が）分かんないから」と語るように、ヘテロセクシュアル男性との会話はいつも自分が一方的に気を遣うことになるため、疲れるものである、と考えている。一方で、ヘテロセクシュアル女性同士の場合は「相手の気持ちを考えながら、受け止めながら話すっていう感じの人が多くて、で話してると楽なんだよね」と感じており、また、ゲイ男性の友人との会話も同様に、「人の気持ちにすごい考えてしゃべってるなっていうか、なんか楽、なんだよね。そういう感じっていうのはやっぱり女の子のほうに多くって、そういう男友達は、いないね」と捉えている。このように、

気は遣いながらも、ヘテロセクシュアル女性の側ばかりが疲れることにならない関係が、Hさんにとっては居心地がよいものとして捉えられている。

Hさんとは逆に、ヘテロセクシュアル女性同士の関係が苦手ために、ゲイ男性との関係を好ましく感じている、という語りも見られた。Fさんは、自分は「基本的には個人プレイ」の人間であるため、学生時代は「女子って、全員一緒、みたいな感じだから、やっぱりきつかったよね」と、ヘテロセクシュアル女性同士の関係を振り返っている。それに対比するかたちで、Fさんはゲイバーでの人間関係を次のように語ってくれた。

F「私がよく、連れてってもらって行ってたところって、ほんつとにすごいのねパワフルで。だから一、みんなもなんかそういう感じのこと（註・仕事上のストレス）でギャーって言うから（略）みんなが言いたいことを言ってるから、言わなきゃ損損、つてのもあるし一、しかも聞いているようで自分のこと言いたいのが一番で聞いてなかったりだから一、それも気が楽じゃん、すごく親身に取られるよりもざ一、『うわー！』つて、みんなで言いたいだけ言っつて、スッキリするみたいな」

このように、Fさんにとってゲイバーは気遣いが全く必要のない場であった。そして、そこでの人間関係は「向こう（註・そのバーにいたゲイ男性たち）がどう思っつてるかは、定かじゃないけど」「あたし的には、すごくつきあいやすい」ものだったという。

3.2 ゲイ男性との関係の居心地の悪さ

前項で見たように、インタビュー対象者はゲイ男性との関係を楽しんでいるが、ときに居心地の悪さを味わうこともある。その居心地の悪さは、インタビュー対象者が女性であること、ヘテロセクシュアルであること、あるいはヘテロセクシュアルの女性であることに由来するものである。

Hさんは女性であるが故にゲイ男性から無視された経験を持っている。Hさんは初めて参加したゲイナイトを振り返り、「怖かったね、あの一番は、こんなに男の人が多い環境に、いたことが、なかったので、怖いよ一つてなつちやつたし、受け入れられるオーラもなかったから、『ふわあー』みたいな（笑）」と、そのときの感覚を語っている。ゲイナイトの楽しい思い出を事前に友人から聞いていたり、ドラマやマンガに出てくるようなゲイ男性のキャラクターに憧れを抱いていたという。Hさんは自分が持つゲイ男性への憧れや、ゲイ男性の友人を欲しがることについて、「興味本位になつちやうのかな、失礼な話だね」と考えている。しかし、興味を強く抱いていた分、ゲイ男性から「女である自分が邪魔」と見られる感覚は、より一層に衝

撃的な体験であったのだろう。Hさんはゲイナイトにおいて、「女である自分が邪魔っているのは初めてだった」と、学生時代にも、職場や社会でも味わったことのない、初めて経験するような排除感を味わったそうである。

また、ヘテロセクシュアルであることを理由に、ゲイ男性から排除された経験を持つのが、Kさんだ。Kさんは「東京レズビアン&ゲイパレード 2006」に参加した経験を持つ。このパレードは、「セクシュアルマイノリティの可視化を目的とした人権パレード」であり、「セクシュアルマイノリティ（性的少数者）やその理解者が、各々の表現方法で」参加するものである（東京レズビアン&ゲイパレード 2006 実行委員会 2006）。つまりパレードは、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティ当事者だけではなく、ヘテロセクシュアル女性が参加することも推奨されたイベントとして開催されている。Kさんは、これらの主旨に賛同し、また、Kさん自身や彼女の友人の多くが大学でジェンダー論・セクシュアリティ論を勉強していたこともあり、セクシュアルマイノリティ当事者の友人たちと一緒に、パレードに参加した。

そのパレード会場でKさんは、初めて出会ったゲイ男性に、「ノンケは帰りなさいよー！」と言い放たれ、ショックを受けたという。Kさんはこの発言に対し、「パレードを、当事者の、お祭りみたいな、考え方ととらえてる人も、少なくないんだなーっていうのを、知」り、パレードの意義が参加者全員に必ずしも理解されていないことに動揺したという。また、Kさん自身はパレードに参加する理由は「足りなくないし、別に、いいと思うんだけど」としながらも、ゲイ男性から「当事者じゃないことをそんな風に熱心に言って、あんた何様？」と問いつめられたように感じ、「ちょっとグサッときましたね」と、そのときの気持ちを語っている。

また、ゲイ男性と仲が良いヘテロセクシュアル女性、という事実自体が不快感の原因となることがある。つまり、いわゆる“オコゲ”として扱われる、ということである。“オコゲ”とは“オカマ（＝同性愛者）”に焦げ付くようにひっついてるヘテロセクシュアル女性のことを示す言葉であり、蔑称として機能している（平野，1994，p. 19）。そこで想定されている女性像は、「女のセクハラ」をしてくるような、「新宿 2 丁目あたりでゲイにくっついて遊んでる女の子」である（伏見，2004，p. 565）。つまり、マスメディアで描かれているような「理想的ゲイ男性」のイメージを内面化し、それを一方的に全てのゲイ男性に対しておしつけてくるようなヘテロセクシュアル女性のことを、ゲイ男性の側から“オコゲ”と称したのである。

先にも紹介したKさんは、“オコゲ”として扱われた経験も持っている。Kさんはゲイ男性4名に同伴して、海外旅行に行ったことがある。Kさん自身は、「たまたまゲイの友だちと知り合う機会が多かった」だけであり、「ゲイの友だちも、ゲイだから友だちなわけじゃなく、単に仲が良いために一緒に旅行をしたと考えている。しかし、その旅行の思い出を話した際に、「ノンケの男の人には、別になんにも言われなないんだけど、ゲイの男の子に、『や、俺がノンケ

だったらそういう女はマジひく』とか言われたことはある」のだという。ここではゲイ男性と一緒に旅行に行ったことが、“オコゲ”的な行動として捉えられている、と考えられる。

Kさんは、ヘテロセクシュアル男性のなかには、「(恋人の女性が)ゲイだとは言ってるけどやっぱり男の子とばかり遊んでるのはいやだ、みたいな、ことを言う人もいる」ということを経験的に理解している。そのため、ゲイ男性が「俺がノンケだったらそういう女はマジひく」ということは、決して的外れなことではない。ただし、ここで確認しておきたいのは、Kさんがゲイ男性の友人と海外旅行に行ったことに関して『マジひく』と言っているのは、ゲイ男性である、ということである。この発言をしたゲイ男性は、「ノンケだったら」という言葉を挟み込むことによって、この差別的発言は自分の思っていることではない、として、発言に対する責任を回避しようとしたと考えられる。しかし、この前置きをしてはいるものの、実際に『マジひく』とKさんに告げたのは、ゲイ男性だ。Kさんはヘテロセクシュアル男性の友人からは、「別になんにも言われ」たことはなく、また、ヘテロセクシュアル女性の友人には、「『Kちゃんもオカマみたいだもんね』って言われたの(笑)『だからわかるわそれ』って言われて(笑)」というように、理解を示されたと考えている。しかし、『俺がノンケだったら』と前置くことで、自分以外の人間もそう考えていることを仄めかしつつも、Kさんの交友範囲のなかではゲイ男性だけが、『マジひく』とKさんに告げているのである。

4 まとめ

本研究では、「ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性」にフォーカスを当て、両者の間でどのような関係が築かれているかを明らかにすることを目的とした。確かに、“ゲイ・ブーム”研究のように、マスメディアにおけるゲイ男性の表象の在り方や、その受容の在り方に対する批判は必要である。本研究で見てきた通り、“ゲイ・ブーム”で描かれた「理想的ゲイ男性」像に近いイメージを抱いている対象者も見られた。また、ヘテロセクシュアル女性に無関心であったり、良い感情を抱いていないゲイ男性の存在もまた、改めて浮き彫りとなった。しかしそもそも、ヘテロセクシュアル女性がゲイ男性と知り合うきっかけや、そこでどのような関係が築かれているかには、様々なパターンが存在しており、興味本位がきっかけであってもそれぞれにゲイ男性との間で良好な関係を築いているのである。

今後は、ヘテロセクシュアル女性が実際にゲイ男性たちの間でどのような振る舞いしているのか、また、ゲイ男性たちがヘテロセクシュアル女性をどのように扱っているのかを、ゲイバーやゲイナイトでのフィールド調査を基に分析していくことも、必要な課題だろう。そして同時に、ゲイ男性をはじめとするセクシュアルマイノリティと実際に関わりを持つ人々の声を、様々なかたちで拾い上げていく研究をしていくことが、今後必要であると考えられる。

【付記】

本稿は、2008年3月国際基督教大学大学院教授会提出修士論文『『ゲイ男性と親交を持つヘテロセクシュアル女性』をめぐる性抑圧構造』の一部を再構成し、加筆訂正したものである。

Reference

- 伏見憲明.(2004).「プライベート・ゲイ・ライフ」. In 伏見憲明,『ゲイという「経験」[増補版]』(pp. 559-659). 東京:ポット出版.(Reprinted from 『プライベート・ゲイ・ライフ—ポスト恋愛論』, by 伏見憲明, 1991, 東京:学陽書房)
- Hall, Jonathan Mark. (1998).「偽りの友 —男性同性愛のあらわれと女性の観客、救済の罫」. In 風間孝, キース・ヴィンセント & 河口和也 (Eds.), 『実践するセクシュアリティ』(pp. 80-92). 東京:動くゲイとレズビアン人会 (アカー).
- Hall, Jonathan Mark. (1999).「消費する男、処理される女、その間に賭けられた同性愛」. 『現代思想 1999年1月号 特集=ジェンダー・スタディーズ』, 27(1), 231-237.
- 平野広朗.(1994).『アンチ・ヘテロセクシズム』. 東京:パンドラ.
- 石田仁.(2006).「セクシュアリティのジェンダー化」. In 江原由美子 & 山崎敬一 (Eds.), 『ジェンダーの社会理論』(pp. 153-165). 東京:有斐閣.
- 石田仁.(2007).「ゲイに共感する女性たち」. 『ユリイカ 2007年6月号臨時増刊号 総特集 腐女子マンガ大系』, 39(7), 47-55.
- 石田仁.(2007).「「ほっといてください」という表明をめぐる やおい/BLの自律性と表象の横奪」. 『ユリイカ 2007年12月臨時増刊号 総特集=BLスタディーズ』, 39(16), 114-123.
- 掛札悠子.(1992).『「レズビアン」である、ということ』. 東京:河出書房新社.
- ヴィンセント, キース., & 小谷真理.(1996). 対談「徹底討議:クィア・セオリーはどこまで開けるか」[Dialogue]. 『ユリイカ』, 5, 34-56.
- McLelland, Mark. (1999). Gay Men as Women's Ideal Partners in Japanese Popular Culture: Are Gay Men Really a Girl's Best Friends? *U.S.-Japan Women's Journal English Supplement*, No.17, 77-110.
- McLelland, Mark. (2000). *Male Homosexuality in Modern Japan: Cultural Myths and Social Realities*. New York: Routledge Curzon.
- 東京レズビアン&ゲイパレード 2006 実行委員会.(n.d.).「TLGP2006:東京レズビアン&ゲイパレード 2006 公式ホームページ」. Retrieved December 1, 2007, from http://www.tlgp.org/index_pc.html
- 吉澤夏子.(2006).「ジェンダーとルーマン・システム論」. In 江原由美子 & 山崎敬一 (Eds.), 『ジェンダーの社会理論』(pp. 91-103). 東京:有斐閣.

Footnote

¹現在の人間の性の在り方は、「生物学的性別・性自認・性的指向」の組み合わせだけでは当てはまらないものが多く存在する一方で、「女性」または「男性」という二分律的な構造、すなわちジェンダーによる分断によって説明されることが多い(石田, 2006)。本論文では、この二分律化されたジェンダーの構造が与える影響を考察し、また、この構造が命令され続け、再生産され続けていく状況を考察したいと考えた上で、ヘテロセクシュアル女性・ゲイ男性をこのように定義する。なお、レズビアン女性は「レズビアン女性:生物学的性別が女性、性自認が女性、性的指向が女性である(とされている／と感じている)人」、ヘテロセクシュアル男性は「生物学的性別が男性、性自認が男性、性的指向が女性である人」と定義したい。

Heterosexual Women who have Close Friendships with Gay Men **Yuji KATO**

This study is based on interviews with heterosexual women who have close friendships with gay men. In the Japanese media's "Gay Boom" phenomenon that arose in the 1990s, gay men were represented as being the ideal partners for heterosexual women. While this has stimulated research and incurred various criticisms from gay and lesbian academics and activists, there has been no qualitative research of heterosexual women.

This study is based on interviews of 14 heterosexual women who have close friendships with gay men. The interviews were of one hour in length and consisted of questions such as "Where did you meet your gay friend and what kind of relationship do you have with them?," "What kind of relationships do you have with heterosexual women and men?," and "Do you have lesbian friends?" Various patterns were discovered in the way heterosexual women got to know gay men and in the kinds of relationships they formed. It also became apparent that even if the initial motivation for meeting had been out of mere curiosity, the relationships eventually developed into close friendships.

Keywords: heterosexual women, gay men, close friendships, "Gay Boom" phenomenon